ポットポイント

朴敬元を供養する人たち

日本で被爆しながらも、戻った韓国社会の中では「無視、冷視されて生き続けてきた」韓国人被爆者の霊を慰めるため、韓国に原爆平和展示館を開き、養老院の運営等の活動に取り組んでいる日本人僧侶・高橋公純さんから動画が送られてきた▼「日本で夢見た女性パイロット～朴敬元の生涯～」なる30分ほどの動画で、日本の大学で勉強している韓国人大学生有志が作成したものだ。朴敬元は１９０１年大邱の生まれで、日韓併合にともなう日本統治下で教育を受けた。学費を稼ぐために17年に来日して横浜にある養蚕職工養成所で働いた後、韓国に戻っていったんは看護婦を目指したものの、25年に再来日して夢であった飛行機の操縦士に挑戦した。多くの苦難を乗り越えて長距離飛行が可能な二等飛行操縦士の資格を28年に取得。資格取得者として81人目、女性としては3人目だった▼31年に満州事変が勃発し、32年には満州国が建国され、〝新天地〟満州をめざす人の流れが加速し、「内鮮満一体化」なる大陸政策が打ち出されるようになる。そうした中、帝国飛行協会によって皇軍慰問日満連絡飛行が計画され、日本と満州の架け橋として朝鮮人女性である朴敬元に白羽の矢が。33年8月7日に搭乗した「青燕」号は羽田から満州に向けて飛び立った。しかしながら離陸して間もなく天候は悪化し、熱海市にある玄岳に激突して帰らぬ人となった。32歳の生涯であった▼韓国では朴敬元は「日本に魂を売った女」として評価する人はなく、無視され続けてきた。ところが遭難現場には「朴敬元嬢遭難慰碑」が建てられ、熱海市の上多賀町内会は毎年命日に供養を続けている。「大それたことは全然ない」「今年も来たよ」という町内会長の話がうれしく、救われたような気がしたのであった。

（土着菌）